

○この数年間、本分科会で議論されてきたこと（内島貞雄さんのまとめより）

- ・特別支援が必要な子どもたちの援助、通級、支援体制等（特に通常学級の在籍者に）
- ・表現活動や行事等を通じた子ども・青年の発達の契機や節目
- ・困難を抱えた家庭や保護者とのかかわり
- ・スクールソーシャルワーカーの必要性と外部機関との連携
- ・長期的視点での青年の自立支援と専門学校も含む地域の施設とのかかわり
- ・ベテランの経験をいかに若い世代に引き継ぐか

レポートは、4本。

報告① 自由が丘月寒スクール（鈴木、吉野、滑川、大塚）

「民間教育における子どもたちの学びと成長」～特に『初等部』のカリキュラム・運営から～

学びが面白い学校をどうつくるか。和歌山県「きのくに子どもの村学園」をモデルとした、自由な小学校をつくる実践の報告だった。宿題もテストもない、学年の壁もない、「先生」とよばれる大人もいない学校。感情面、知性面、人間関係の自由を大事にする学校。それをめざした実践のなかで、発達に課題を持っている子どもが成長する様子が報告された。

「地球に生きる科」は理科と社会の合科的な授業。「やってみる科」は子どもが自分でテーマを決めて調べたり創造する授業。「人間科」は人間の生き方や性について話し合ったり、感想文で紙上討論を行う授業。大人の都合や点数競争で子どもを急かしたり、強制することをやめる。そういう学校の存在と実践は、一般的な学校の「あたりまえ」が子どもの育ちを歪めるものではないかと考えさせられる報告だった。

報告② 稚内 H 小学校（東本麻里）

「チーム学校として校内・校外連携を強め、『支援』していくには」《非公開》

通常級の中の発達に課題を持った子どもとのかかわりについて、具体的な支援とその子どもの成長のようすがきめ細やかに報告された。教室における「合理的配慮」やユニバーサルデザインについても、どのような工夫をしているかが、よく伝わってきた。

また、今困っていることについても率直な話題提起があり、分科会参加者の共感もよび、「こんなときには、このようにしている」などといった交流が行なわれた。

報告③ 上ノ国町立 K 小学校（鈴木真弓）

「ひとりひとりを見つめる」《非公開》

複式校で児童数が少ないが、発達に課題がある児童の比率が高く、ひとりひとりの特性を踏まえて、粘り強く指導・支援を続けてきたことがわかる報告だった。

6年生になって担任した子どもたちについて、2年生の頃からの育ちや変容、保護者を含む環境まで、とても具体的につかんでいることが伝わってきた。学習面では、4人ともそれぞれに課題をもっている。

今までに習った漢字が書けない、繰り下がり・繰りあがりの計算が苦手な A くん。基礎的な学力は 4 人の中では一番定着しているが、学習意欲が一番低い B くん。文章の音読ができず、漢字、カタカナを書くのが非常に苦手な C さん。語彙が少なく、既習事項の定着が弱い D さん。4 人とも個別指導が必要な状態である。

学習面での大きな困難を抱える 4 人だが、運動会や学習発表会といった行事のなかで、1 年前よりも確かに成長したことを感じさせる姿を見せていた。学習発表会ではノリが良くない 5 年生を励ます姿も見られた。また、総練習後、教師が指導するだけではなく、自分たちで「もっと、こうした方が良い」と言い合う反省会を行なった。子どもたちの意見や考えを大切に、発表を作り上げていった。

支援を必要としている子どもたちが、自分の持っている力を発揮するには、セリフの漢字が読めない人には、台本にすべてフリガナをつけるなどの合理的配慮が大切である。しかし、それだけではなく、彼らの判断や意思、自主性が尊重される取り組むだからこそ、達成感を味わい、自分の成長を実感できたのだと思われる。

報告④ 稚内 S 小学校 (長畑幸太郎)

「気持ち揺れる児童～上手な自分との付き合い方を求め～」《非公開》

4 年生の通常学級 (33 名) を担任して、出会った A くんとの関わりを分析して書かれたレポート報告。A くんは、多動で衝動性が強く、集団のなかでの生活に困難を抱えている。テストでは高得点を取ることができるが、点数や勝負事への執着が強く、点数が悪かったり、負けたりすると大暴れし、落ち着くまでに時間を要する。

この A くんの変容とそのきっかけになったエピソードが具体的に語られた。また、保護者との関わりや少年団活動の影響についても、分科会参加者と考察しあうことができた。

分科会のまとめ

分科会参加者は、小学校教員、中学校教員、高校教員、フリースクールスタッフ、引きこもりの青年サポートに携わる人など多様だったが、今回の分科会では「特別な支援を必要とする子ども」をどのよう理解したらよいかを考え、語り合う場となった。多動性や衝動性が強く、一斉指導に馴染めず苦しんでいる子どもの特性をどう見るか。教員としては、「困った子ども」「周りに迷惑をかける人」と見てしまいがちだが、その一見「困った行動」「迷惑な振る舞い」には、その子には必要な意味がある。周りを困らせようとか、迷惑になるという感覚はなく、その子が緊張感の高い息が詰まるような場に身を置くためには、必要な行動・振る舞いであること。そのような理解のしかたが必要なのではないかという意見も出された。どの参加者にもそのような子どもとの関わりに悩んだり、苦しんだ経験があるので、互いに共感したり、改めて考え直すきっかけを与えられた討議となった。

来年度の課題

- ・この分科会は、多様な発達援助職の人々が語り合う貴重な場となっているので、来年度は参加者がさらに増えるように働きかけを強めていきたい。
- ・就学前の幼児教育や保育現場、学童保育など学校以外の場所で、子どもの発達を支える仕事をされている人の実践にも学んでいきたい。

*冒頭の内島さんのまとめ 参照。